國語語序論序説

今泉忠義

源氏物語を教材に用ゐる度に、気にかかるのは、次のやうな文章である。

○大殿油近くて、書どもなど見給ふついでに、近き御厨子なるいろいろの紙なる文どもを引出でて、中将、わりなくゆかしがれば　（帚木）

○一日前駆おひてわたる車の侍りしを、のぞきて、童女の急ぎ来て　（夕顔）

これらは、今の普通の文章なら、「中将」なり「童女の」なりがもつと上の方に来て、

○中将、近き御厨子なるいろいろの紙なる文どもを引出でて、わりなくゆかしがれば、

○一日前駆おひてわたる車の侍りしを、童女ののぞきて、急ぎ来て、

となつてゐても、よささうなところである。だから、いはないことではない。あの頃の文章を読む場合には、性急であつてはならない。一体誰が引出したのか、のぞいたのは誰なのだらうか、などと気を揉むのは余計なことで、おちついて読んで行くうちには、何れ、誰のことかわかつて来るものなのである、と。要するに、主語があとの方に廻る癖があつたのである。これと同じ用例を少し挙げてみよう。

○いでや、上の品と思ふにだに難げなる世なと君はおぼすべし　（帚）

○ここら年を経て、今更に帰るも、なほ思ひつきせず、尼君は泣き給ふ　（松）

○乳母をも引別れなむこと、明暮の物思はしさ、つれづれをも打語らひて慰めならひつるに、いとどたづきなきことをさへ取添へ、いみじう覚ゆべきこと君も泣く　（薄雲）

○まことの知らぬ国に来たらむ心地して、あはれにおもしろく、見ならはぬ女房などは思ふ　（胡蝶）

○まことに、ゆかしげなきさまにはもてなさじと大臣はおぼしけり

○思ふことなくは、をかしかりぬべき御有様かなと姫君はおぼす　（螢）

○夕つけゆく風いと涼しくて、帰りうく若き人々は思ひたり　（常夏）

○中将もいとひ給ふこそ、大臣は本意なけれ　（常夏）

○また寄りて見れば、物聞えて、大臣もほほゑみて見奉り給ふ　（野　分）

○内裏へ参り給はむことを安からぬことに大将おぼせど　（真木柱）

○匂の深さ浅さも、勝負の定めあるべしと大臣宣ふ　（梅　枝）

○かへる浪にきほふも口惜しく若き人々思ふ　（若菜、下）

○夜書あたりさらぬ耳かしがましさを、うるさきものの心苦しきものに、かんの殿もおぼしたり　（竹　河）

○はかなき御返りも、聞えにくくつつましき方に女がたはおぼいたり　（椎　本）

○いかで引きすぐれて、おもだたしき程にしなしても見えにしがなと、明暮この母君は思ひ扱ひける　（東　屋）

など、挙げるにも堪へないほど用例は随分多い。これらも、「君は」「尼君は」「君も」「見ならはぬ女房などは」「大臣は」一姫君は」「若き人々は」「大臣は」「大臣も」「大将」「大臣」「若き人人」「かんの殿も」「女がたは」「この母君は」などの、主語になるものが、もつと上の方に来た方がわれわれにはわかりやすいだらうと思はれる。特に右に挙げた「若き人々」に類する、

○いとをかしう、うちとけぬ遊びぐさに誰も誰も思ひ聞え給へり　（桐　壺）

○いとわりなき御程を、如何に思ほすにかと、ゆゆしうなむ　（若　紫）

誰も誰もおぼしけるに

○まだいとあえかなる御程に、いとゆゆしくぞ誰も誰もおぼすらむかし　（若菜、上）

○…とて立つを、あさましくかたはに誰も誰も思へど　（東　屋）

○空の色、物の音も、春の調べ轡はいと勝りけるけぢめを、人々おぼしわくらむかし　（胡　蝶）

○三條の宮に侍りつるを、風いたく吹きぬべしと、人々の申しつれば　（野　分）

のやうな「誰も誰も」や「人々」が多いのは、どういふわけであらうか。近代から現代へかけての特徴として、特に主語を書きあらはすことの多くなつたことは事実である。現代のこの事実は、欧文の直訳の影響なども大いにあることだらう。或はこれには、自我意識の拡充といつたやうなことも考慮せられるかも知れない。しかし、どちらにしても、源氏などに、かうして主語があとへあとへと廻ることの多いのは、どんな理由によるのであらうか。一度は考へておいてもよささうに思はれるのである。もつとも、こんな用例もある。

○小さき女君の、何心もなく晝寝し給へるところを、昔の有様おぼし出でて、女君は見給ふ　（螢）

では、現代の文章であつたとしても、主語の女「君は」を、「昔の有様おぼし出でて」の上に廻して、

○小さき女君の、何心もなく晝寝し給へるところを、女君は、昔の有様おぼし出でて見給ふ。

としたら、十分通るところではある。しかし、また、

○女君は、小さき女君の、何心もなく晝寝し給へるところ

を、昔の有様おぼし出でて見給ふ。

でも、通りさうなものである。ただ、かうなると、「女君は、小さき女君の」と続いては、余りにも聞きにくく語りにくいところから、「女君は」をずつとあとに廻したのだらうと考へられはしないか。

○大将殿、昼もいと隠ろへたるさまにもてなして籠りおはするを、いと心づきなく、かんの君はおぼしけり（真木柱）

でも同じことで、このままでは、如何にも「かんの君」があとに廻り過ぎてゐる感がするのであるが、しかし現代のわれわれとしても、「いと心づきなく」の上に「かんの君は」を持つて行つてくれれば、随分わかりやすくなると思ふ。そればかりでなく、われわれには、「かんの君は、大将殿が昼も…いと心づきなくおぼしけり」の方がもつとわかりやすいはずだから、源氏としても、

○かんの君は、大将殿（の）昼もいと隠ろへたるさまにもてなして籠りおはするを、いと心づきなくおぼしけり。

としてゐてくれてもよささうだのに、どうしてかうはなつてゐないのだらうか。また、こんな例もある。

○心よくかいひそめたるものに、女君もおぼしたれど（玉鬘）

これは、女君も右近を心よくかいひそめたるものに思つてをられるけれども、といふのである。「右近を」は、文脈によつて、わざわざ書きあらはさなくてもよくわかる。それなら、いつそのこと、「女君も」を一番上に持つて来たらいいのではないかと思はれる。事実、

○物の心知り給ふ人は、かかる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目を驚かし給ふ（桐壺）

のやうに、前の用例でいふなら、「女君は、小さき女君の」「かんの君は、大将殿（の）」と同じやうな構文を有する例もあるのであり、また、

○かしこまりたるやうにて、昔いと涼しき勾欄に背中おしつつ侍ひ給ふ（常夏）

のやうに、これまでの用例なら、「皆侍ひ給ふ」とあつてよささうだのに、はつきりと、「皆」が上に来てゐるのもあり、

○この御方も、いと心細く、ならはぬ心地に立ち離れむことを思へど（東屋）

のやうに、これもこれまでの例なら、「立ち離れむことをこの御方も思へど」とありさうなものだのに、「この御方も」がはつきり一番上に来てゐる。こんな例もあるのである。単にあるといふよりも、比較したら、かうして主語が一番上に来る、つまりわれわれにはわかりやすい構文の方が、或は多いかも知れない。今の文章でも殊に対話では、主語があとに廻ることは相当に多い。しかし今は普通には、まづは主語は最初に来るものと考へられるであらう。従つて平安時代などの、かういふ構文のものは、現代の人々にはちよつと取つつきが悪いのも無理はない。そして、こんな構文の文章が何故行はれたのか。或はそれは、国語の特質として、必要でない限り、特に敬語法では時にはわざわざ、主語をいひあらはさないことと関係があるのではないだらうか。かういふ構文に属するものは、勿論源氏に特有なものではない。例へば、

宇津保物語をちよつと見ても、

○これに御酒入れてまゐれとこそ、うち上は宣ひつれ　（藏開、上）

と見え、狹衣にも、

○古代の懸想文の返事は、伊勢がかかることをしける　（三ノ中）

○あはれにはかなきことを誰もおぼさる。　（四ノ下）

など、少し注意したら、いくらでも見つけることができる。

もう一つ、おもしろいと思はれるものに、同じやうではあるが、次のやうなのがある。

○さるべきにこそ、万のこと侍らめ　（夕顔）

○さこそは、物はありけれ　（若菜、下）

これもやはり、今のわれわれの気持では、逆にして、「萬のこと、さるべきにこそ侍らめ」「物は、さこそはありけれ」となつてゐてくれなければ、取つつきが悪いやうである。取つつきが悪いところでなく、或は、こんな言廻しでは、物がいへないのではないかとも思はれる。

次に気にかかるのは、次のやうなのである。これも例はいくらでもあるので、その中の少しを挙げてみよう。まづ初めに、

○強ひて思ひ知らぬ顔に見けつも、いかに程知らぬ様におぼすらむと、心いたくもさすがに思ひみだる　（帚）

である。この文章の「さすがに」の位置が、今から考へて少し変に思はれるのである。いふまでもなく、「さすがに心いたくも思ひみだる」とあつてくれた方が、われわれにはわかりがよささうに考へられるのであるが、どんなものだらうか。

○風にきほへる紅葉のみだれなど、あはれとげに見えたり　（同）

などでも同じことがいへる。「げに」をもう少し上の方は持つて来て、

○げにあはれと見えたり。

となつてゐた方がわれわれにはわかりがいい。

○とかくひきつくろひては、などか見ざらむ　（同）

でも、「などか」を「とかく」の上に持つて来ようとしたら、とかくの議論も出るかも知れないが、「ひきつくろひては」の上に持つて来ることには、異論もないだらう。こんな例を少し挙げてみようといふのである。

○いとをかしうやうやうなりつるものを　（若紫）

○げにいといたう面やせ給へれど、いとあてに美しくなかなか見え給ふ　（同）

○鈍たる御衣どもなれど、色あひ重なり、好ましくなかなか見えて　（朝顔）

○そこはかとなく物を心細く思ひて、音をのみ時々は泣き給ふ　（柏木）

○心地なくなどはあらぬ人の、なま腹立ちやすく、思ひのままにそ少しありける　（東屋）

○右近が従者の名を呼びて逢ひたり。いと煩はしくいとどおぼゆ　（浮舟）

○そのことなけれど、世の中の物語などしつつ、しめやかに

傍よりは居給へり　（蜻蛉）

○帰りなむとするを、笛の音さへあかずいとどおぼえて　（手習）

○さまざまいとうたげにて物し給ふを、あはれに心苦しう　（橋姫）

いかがおぼさざらむ

など、これも実に多い。そして、いふまでもないことながら、初めの例から、「やうやう」「なかなか」、もう一つ「なかなか」、「時時は」「少し」「いとど」「例よりは」「いとど」「いかが」を、少くとも「いと」の上に、次も「いと」の上に、「好ましく」「音をのみ」「思ひのままにぞ」「煩はしく」「しめやかに」「あかず」「あはれに」などの上に持つて行つてもらつた方が、今ではわかりがいいだらうと思はれるのである。連用修飾語の中には、前の主語と同じやうに、今の普通の文章よりは、述語に直ちに連なる用例があつたのである。次も同じやうなことがいへはしないか。

○こなたはかくれの方にて、ただ気近き程なるに、厳しき御産養などの打頻り、ひびきよそほしき有様、げにかひある浦と尼君のためには見えたれど　（若菜、上）

○むげに世のことわりを知り給はぬこそ、らうたきものからわりなけれ　（宿木）

○これより勝りてことごとしき際の人はた、かかるあたりをさはいへど尋ねよらじ　（東屋）

などについてである。少し長いけれども、「尼君のためには」「らうたきものから」「さはいへど」が、もう少し上に、つまり「げにかひある浦と」「むげに」、次は少くとも「かかるあたりを」の上に持つて来た方が、われわれにはわかりがいい。どういふものか、連用的修飾語が述語に直接に連なりやすかつたものと見える。もつとも、これにも主語の場合と同じやうに、今のわれわれに少しも変な感じを持たせないやうな用例もたくさんあるが、一々実例を挙げるのは、ひかへておかう。ただ、源氏以外の例を、もうちよつと引いてみよう。宇津保にもある。

○ここの御様なるは、されどなし　（蔵開、下）

○深き労ありけりとも、いとどおぼゆるかな　（初秋）

など。まだこの外にもたくさんある。時代とともに文章の構造にも変遷のあることは当然なのであるから、これらの例のやうなものがあつても、別に不思議はないといふなら、それまでである。そして、和歌には修辞的に趣向を凝したと考へられるものもある。和歌と同じやうに、普通の文章にも、わざとひねつたものもあるだらう。ただ、枕詞でも序詞でも、修辞的に用ゐられるやうになるまでに、実用的に用ゐられた、それを用ゐなければ物のいへなかつた時代が先行してゐたことは忘れてはならない。それに思ひよせてみると、主語と述語との直結も、連用的修飾語と述語との直結も、現今では少い用法になつてゐるだけに、当時としてはごく普通の用法であり、或はある意味では、これらが遠れ離れになるよりも、古い用法を残してゐたのではないだらうか、などと考へられるのである。勿論、もつともつと上代の文献まで調べ、特に和歌の言ひまはしなどと比較し検討を加へる必要はあるが、文章史、大げさな言ひ方をするなら、時代による語序の変遷といつたものの一面が、こんなところから少しは摑めさうにも思はれる

のである。

まづ私には、こんな風に主語と述語と直結し、また、連用修飾語と述語と直結するものには、何か習慣があつたやうに思はれてならない。それは、もつと古い時代の名残としてである。或はこの推定がまるで逆で、こんな言ひまはしが実は平安の物語などに特有なものにしかならなくなりさうなことも考へられるが、少くとも今のところ、私は敢へてこんな推定をしてみたいのである。上代には普通に行はれた構造が、平安時代にはごくきまつた言ひ方に残つたとでもいふことになつたら、おもしろいだらうと思ふ。

今の文章の構造と比較すると、次のやうなのも今よりはもつと多く見える形式でもありさうである。

○大臣ぞ、なほ常なきものに世をおぼして　（絵　合）
○姫君のおはします大殿の東面に御方はしつらひたり
（若菜、上）

○南の庭の藤の花のもとに、殿上人の座はしたり（宿　木）

などである。ここでも、「世を」や「御方は」「殿上人の座は」などが、もつと上の方にあつた方がわかりやすいなどと勝手なことをいふと、今だつて文章にもあるし、対話での口頭語ならいよいよ多いだらうし、別に気にかける必要はないともいはれさうであるが、何か私には気にかかつて仕方がない。かういふのになると、目的語と述語との直結といふことになるだらうか。

さて大分話が遅くなつたやうではあるが、国語の言ひまはしにおいての主語と考へられるものは、文章論と品詞論とをごつちやにするやうであるが、所有格から次第に主語らしくなつて来たものが多いやうである。といふよりも、「が」がさうであり、「の」はまだ今もつて所有格のおもかげを残してゐると、こんな風に助詞の側から見た方が適当であらうか。とにかく、主語と見るよりも連体修飾語かそれに近いものと見られるものの方が古いやうで、例の「すくすくとわがいませばや」のやうな形式のものを考へ、「日が隠らば」のやうなものを見ても、そんなことが考へられる。もしこんなことがいへるなら、まづ主語と述語との直結がもとの形式であることは、いへさうに思はれる。

いはずもがなのことまで述べてしまつた。ところで、勿論、かういふ方面に関しては、地の文と詞とを区別する必要のあることはいふまでもないが、つい私はごちやごちや例を挙げてしまつた。それからもう一つ、源氏などでは異本に当つてみなければならないことも勿論である。例へば、首書本では、

○男、胸つぶれて思ひくらし給ふ　（真木柱）

とあるのに、河内本には、

○胸つぶれて、男おぼしくらし給ふ。

とあるほどである。是非とも異本は精査したいものである。なほ、この小稿も、首書本によつて例を引いたのであるが、そこまでは、一々おことわりもしないでしまつた。要するに、国語の語序論を述べようといふ目的が、初めからあつたともいへない。ちよつとその恰好を見せただけである。せめても、何かのお役に立てばと思ふ次第である。どなたかもう、こんなことをお考へになり、既に述べてをられるのではないかと、只管おそれるばかりである。

——国学院大学教授・文学博士——